

シランミン（失郷民）とタハンサリ（他郷暮らし）

Lee, Youngmee / 李, 英美

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

48

(終了ページ / End Page)

72

(発行年 / Year)

2004-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002105>

シリャンミン（失郷民）と タヒャンサリ（他郷暮らし）

李 英 美

- 一 「離散家族を探しています」—はじめに
- 二 韓国戦争によるシリャンミン
- 三 タヒャンサリの始まり
- 四 タヒャンサリ、それは働きつづけること
- 五 離散家族との再会
- 六 「シリャンミンの夜の歌」
- 七 まだ終わっていない韓国戦争—むすびにかえて

一 「離散家族を探しています」— はじめに

一九八三年六月三〇日夜一〇時、韓国国営テレビ放送の KBS で、韓国の国民的な女性歌手パティ・キムの切なく悲しい歌声が流れていた⁽¹⁾。

「誰かこの人を知りませんか、身だしなみの端正な、輝く瞳の持主の、誰かこの人を知りませんか…」と、歌詞は続く。

画面には芸能人ではない一般人が、探している人の名前や歳、身体的特徴、別れた時や場所などを書いた紙を、両手で胸の前に立てている姿が映し出されていた。

このテレビ番組は、韓国戦争（一九五〇～三年）の時や、その前後に離れ離れとなり、行方のわからなくなった家族を探していることを、テレビ電波を通して広く知らせるために設けられた。当初は、翌朝の一時まで約三時間の生放送を企画し、放映された。全国に放映された翌日、別れた家族を探す人々の申し込みが放送局に殺到したため、放送局は急遽正規番組を取り止め、五日間の生放送を執行することにした。この期間中、ソウル

の真中を東西に流れる漢江（ハンガン）の中洲である汝矣島（ヨイド）の放送局前は、連日、ほんの数分間、否数秒間のテレビ出演のために何時間も待つ人々が長蛇の列を作っており、放送局前の広場は、五万余名の人々が訪れ、また人を探す内容の何万枚もの紙が地べたにテープ止めして張られ、地面を白く埋めつくしていた。

家族を探す人々は、その紙と紙の間を、一枚、一枚、丁寧に読むために立ち止まったり、ゆっくりとつぎの張り紙に向って動いたりしていた。それらの人々と、止めテープの剥がれた紙が時折風に靡いていたその光景は、視聴者の心を画面のなかに吸込むものであった。その光景を撮っていたテレビ画面が、「誰かこの人を知りませんか…」という音楽とともにズームダウンし、遠ざかっていくと、視聴者の目を潤ませ、人々の動きと広場の地面の紙を白い点とさせ、視野から消していくのであった。

テレビでは連日、出演順番に沿ってひとりひとりが、探す家族の特徴について述べ、少しでも似たような人を知っている人は情報を寄せてくれるよう、テレビカメラに向って訴えていた。放送途中、テレビを見て駆け付けた家族との再会の瞬間がオンエアされ、テレビを見ている全国の人々の目頭を熱くさせた。この時放送局に駆けつけて、別れた家族に会えた人々は主に、韓国戦争の後、三〇年間もの歳月を同じく韓国の空の下に住んでいながら、お互いに行方不明あるいは北朝鮮に残っていると思ひ込んでいた人々であった。この期間中にだけ、五〇〇余名の離散家族が再会し、番組の視聴率は七八パーセントという高視聴率を記録し、また放送は電波に乗って世界各地に伝えられていった。

別れた人に出会えた喜びの泪で溢れ、お互いの顔を手で確かめあっている家族をよそ目に、自分の家族を探す内容の紙を首から胸にぶら下げて、現われない家族を待ちつづける、しわだらけのお爺さんの顔が何と淋しそうだったものか。忽然と立ちすくんでいた老人の姿もまた、「誰かこの人を知りませんか…」という音楽とともに、ズームダウンしながら画面からどんどん小さくなっていった。

その後も、別れた家族を探し、申し込む人々の数は、全国各地から上京した人達によって絶えることなく増え続けていたために、放送は同年一月月までに総一三八日間に亘って「離散家族探し」の番組として放映されることとなった。放送中に、総数一〇万九五二件の申し込みを受け、海外か

らの電話による所在確認連絡や韓国内居住者の生出演などにより、一万一八〇余名の離散家族が再会するという成果をあげ、単一主題生放送の最長放映記録を残し、幕を下ろした。どれほど、離散家族探しに人々の関心が高かったかを物語る数字である。

一九九〇年一月には、サハリン放送・ソウル KBS・大邱 KBS による三角衛生放送により「サハリンの離散家族を探しています」という番組が放映され、在サハリン同胞と韓国内居住の一八家族が画面を通して劇的な再会を果たした⁽²⁾。

一般に故郷を離れたあと、自分の意思とは無関係に故郷へ戻れなくなった人々をシリャンミン（失郷民、displaced person）と称し⁽³⁾、シリャンミンの殆どがそうであるが、特に家族と離れ離れになった人々のことを、韓国ではイサンカゾク（離散家族）と呼んでいる。

韓半島の場合、シリャンミン及び離散家族とは、「日本統治期の徴兵・徴用、韓国戦争の時の越南・拉北及び越北、戦後日本からの北送船による北朝鮮への帰郷、その後の脱北」によって⁽⁴⁾、故郷を離れ、中国・サハリンなどのロシア・日本・韓半島内・その他の国及び地域に散らばって、タヒャンサリ（他郷暮らし、uprooted）⁽⁵⁾を余儀なくされている人々のことを指すことばである。従って、タヒャンサリとは韓民族のディアスポラを総称するものとなる。

そのことを象徴するのが、日本統治下の一九三四年に発表された、「タヒャンサリ、幾年経たのか、指折り数えれば…、故郷を離れ一〇余年、振り返れば、泪、泪…」と続く「タヒャンサリ」（作詩・金陵人、作曲・孫牧人）という、静かで悲しいメロディの大衆歌謡の存在である⁽⁶⁾。この曲は、当時故郷を離れ、中国・ロシア・日本あるいは、植民地経済開発により農村を離れて都会へ出て来た人々の心境を詠ったものである。以後、「タヒャンサリ」の歌は、韓国戦争勃発という民族の悲劇によって、絶えることなく、引続き人々の間に、永く、永く、歌い継がれていくのであった。

本稿では、そうしたタヒャンサリのなかの、韓国戦争によるシリャンミン及び離散家族の形成過程を概観する。

(1) 『離散家族を探しています－TV 特別放送一三八日間の記録』韓国放

送公社、一九八四年。

- (2) 『斗山世界大百科事典』斗山東亜（ソウル）、yahoo! Korea HP（HPは、インターネット上のホームページのこと、以下同）。
- (3) 前掲『斗山世界大百科事典』。
- (4) 『南北離散家族の実状と再会の当為性』、離散家族情報統合センターHP。
- (5) 前掲『斗山世界大百科事典』。
- (6) 「タヒャンサリ」の歌は、一九三二年コロンビアレコード社主催の新人歌手選抜大会で入賞した高福壽（コボックス、一九一〇～七二年）が、三四年 OK レコード社にスカウトされた際に歌ったものである。高は配偶者の黄琴心（ファングムシム）とともに、国内各地はもとより、中国東北（トンペイ）地方などの同胞居住地を巡回講演し、人気を博していた。韓国戦争の時は拉北・救出という経験を持ち、戦後の五七年に歌手引退、東和芸術学院を設立し、後進養成に尽力した。戦後韓国演歌歌手の女王と称される李美子（イミジャ）などを輩出した。同上。なお、この曲と解説は、笠木透音楽センター『鳥よ鳥よ青い鳥よ一日本の侵略と韓国の抵抗のうた』たかの書房、一九九九年、を参照のこと（CD付き）。

二 韓国戦争によるシリヤンミン

一九五〇年六月二五日韓国戦争の勃発から、五三年七月二七日休戦協定までの間に、戦乱を逃れて越南（北から南へ来ること）した人々の数は、休戦直後の五三年韓国政府統計によると、六一万八七二一名であった⁽¹⁾。この数字は戦時中に越南した避難民の数のみであり、戦時中と休戦後に拉北及び越北した人々、韓国解放から戦争までの間に南北を往来していたが韓国戦争によって足止めされた人々の数を含めると、韓国戦争が原因で故郷に帰れなくなった人々の数字はより高いものとなる。

一九四五年八月一五日韓国解放直後、同二四日には平壤にソ連軍指令府が設置され、九月二日に日本の降伏文書調印が終わると、マッカーサー連合軍総司令官によって北緯三八度線を境界とする米ソ占領策の発表があり、同一九日ソウルには米軍政庁が設置された。そして、翌四六年には米

軍政庁により南側の人々の三八度線無許可越境を禁止することになるが、再び四七年には三八度線以北との交易は国内商業と見做され、米ソ軍政当局の合意下で南北物資交易を認めた。しかし、四八年北の朝鮮民主主義人民共和国、南の大韓民国の政府樹立後、韓国政府は四九年対北交易禁止を発表するに至った⁽²⁾。そのために、この間に南北を商売で行き来していた人々の間に、シリャンミンが存在することになったのである。

そして、韓半島の南北をローラーで二回転往復したとされる韓国戦争の戦火は⁽³⁾、戦乱を逃れて南下する数十万人の避難民のほか、戦況の優劣により、北側が優勢の時は南北で多くの男性が北側の人民軍名義で徴兵拉北され、またそのことを恐れて、北から南へ逃げ隠れし、あるいは南北の両地域から海外へ逃亡する人が大勢いた⁽⁴⁾。さらに、多くの南側の言論人が拉北されたのである⁽⁵⁾。

従って、これらの人々も韓国戦争によるシリャンミンの範疇に入れて考えるべきであり、同時に上述の数字は北朝鮮にも該当するのであるから、北朝鮮人口の多くがシリャンミン及び離散家族であることを常に念頭に置くべきである。

以上のように、韓半島では、休戦のまま南北軍事境界線が確定されることにより、多くの人々がシリャンミン及び離散家族となり、タヒャンサリを強いられることとなった。

その後韓国では、上記四六年の三八度線無許可越境禁止により事実上の南北往来が不自由になったため、四八年米軍政庁によって北側出身の人々に対する戸籍臨時措置に関する法令が出され⁽⁶⁾、「一九四五年八月一五日以前に未修復地区に本籍を持つ者として、未修復地区以南地域に居住することになった者」は⁽⁷⁾、「仮戸籍」の申告をすることになった⁽⁸⁾。以後、この法令は韓国政府に受け継がれることになったが⁽⁹⁾、「仮戸籍」の申告は北に残した家族までを全部記載する例が多かったために、この間は韓国のシリャンミン数を正確に把握できないままの状態であった。

そのため、一九六七年「不在宣告などに関する特別措置法」が発せられ⁽¹⁰⁾、軍事境界線以北に残した家族（残留者）、軍事境界線以南へ居住移動後に行方不明になった者（不在者）が、戸籍から除かれ、シリャンミンの実数把握が計られた。

ところで、韓国では早くも一九四九年五月には「以北五道庁」という政

府機関が開庁され、シリャンミンに関する一般行政の窓口事務を担当していた。「以北五道庁」では、「不在宣告などに関する特別措置法施行令」に従い⁽¹¹⁾、残留者確認証明書の発給申請書の受け付けなどの事務を取り扱い、七〇年には「仮戸籍」の申告受け付けを担当した。この時、シリャンミン人口として、戸主と家族数を含めて五四六万三〇〇〇人が登録された。その数字が、今日に至るまでの韓国戦争によるシリャンミン人口計算の基礎資料となっている。

その後、韓国の人口増加率の累計を適用して推算した結果、九八年の時点でシリャンミンの総数は七六六万七〇〇〇人であるとされた⁽¹²⁾。今日、「一千万離散家族」などと呼ばれる所以である⁽¹³⁾。

このように、韓国戦争によるシリャンミンの発生後、他郷で「仮戸籍」を持つことによってシリャンミン人口が確定されていった。

現在ではシリャンミン二、三世が新たなシリャンミンとして生きることとなった。しかし、シリャンミン一世とは異なり、韓国が生まれ故郷である彼らにタヒャンサリの意識はもはやない。ひと昔前は、「タヒャンサリ」の歌をよく耳にしたものである。シリャンミンの人も、シリャンミンでない人も、韓国戦争を経験した世代の人々はこの歌を愛誦しており、いつも町のどこかでこの歌が流れていた。今はその世代の人々は、老いて亡くなり、あまり聞かれなくなっている。また、シリャンミン二、三世にとっては無縁の歌となっている。シリャンミンのことが何ひとつ解決されないまま、「タヒャンサリ」の歌は、この世から忘れ去られてゆくのであろうか。

- (1) 韓国政府社会部（現、行政自治部）による一九五三年の調べ。「全国シリャンミン村の現況」、MBC（韓国文化放送）HP、二〇〇〇年八月一五日記載。
- (2) 『南北関係日誌』、韓国政府統一部 HP。
- (3) 朝鮮戦争による一般人の死亡・虐殺者は、南側のみでも三七万三九九名であった。「六・二五資料室」HP。因みに、朝鮮戦争のことを韓国では「六・二五事変」（ユギオサビョン）と称しており、「六・二五」は戦争勃発日のことを指す。
- (4) 拉北者は現在、前掲離散家族情報統合センターHP で公開している

『拉北者名簿』にある数字だけでも、一〇万九三三六名である。

- (5) 「拉北言論人」『拉北者名簿』、前掲離散家族情報統合センターHP。
拉北言論人は、二二七名となっている。
- (6) 米軍政法令第一七九号「戸籍臨時措置に関する規定」。
- (7) 未修復地区とは、「一九五三年七月二八日現在修復されていない行政区域をさす」（法律第二八二四号「在外国民就籍・戸籍訂正及び戸籍整理に関する臨時特例法」第二条第四項、一九七三年制定、一九七五年一部改正）と、韓国側から見た北側の領土に対する表現である。
- (8) 「仮戸籍」は申告を受けつけた市・邑・面長が編制し、その効力は戸籍と同一であり、戸籍法においても認められていた。
- (9) 法律第五三五号「戸籍の臨時措置に関する規定」、一九六〇年制定。
- (10) 法律第一八六七号「不在宣告などに関する特別措置法」、一九六七年制定。
- (11) 大統領令第二八八六号「不在宣告などに関する特別措置法施行令」、一九六七年制定。
- (12) 『道民現況』、以北五道庁 HP。前掲『南北離散家族の実状と再会の当為性』。七〇年代以降における韓国の人口増加率から換算した九八年のシランミン人口は、北朝鮮専門研究機関である韓国の「東和研究所」の統計によるものである。韓国政府の公式的立場からもこの数字を用いている。
- (13) 例えば、南北離散家族当事者達の家族再会事業を主導する団体として一九八二年設立された「一千万離散家族再会推進委員会」は、早くも「一千万」という数字を用いていた。『南北離散家族交流のための政府と民間の努力』前掲離散家族情報統合センターHP、二〇〇三年、一三頁。

三 タヒャンサリの始まり

大多数のシランミンは、村を形成せず、個々に全国各地に散らばって、その地域の出身住民と混住しながらタヒャンサリを始めた。韓国戦争の時に北から村をあげて南下した同郷人同士が、あるいは越南民が自然に集住し、それぞれの定着村を形成したケースもある。

個々に全国各地に散らばったシリャンミンのタヒャンサリの始まりについては、まだ明確に把握されていないので、以下では定着村の場合のみを概観する。

シリャンミンの同郷人同士による定着村には、京畿道の民通線内のシリャンミン定着村、全羅南道珍島郡のアンノン村、江原道東草市のアバイ村、全羅北道金堤市龍池面のヨンヂ農園などがある。

そのなかで、京畿道の民通線内シリャンミン定着村の場合、休戦によって軍事境界線（MDL、所謂休戦ライン）の南方限界線（DMZ、非武装地帯、南方幅二キロ）以南の五～二〇キロ以内は民間人出入統制線（民統線）が引かれ、その内側にあった一一村の人々三万七〇〇〇余名の出入りが徹底的に封鎖され、以後村民達はシリャンミンとなった。その後、四〇年近くの歳月を経た後の一九九〇年韓国国防部の政策によって、その範囲が大幅に北上調整されたため、五一村の一万九〇〇〇余名の通行が自由になってきた。これによって、〇一年からは、「軍事施設保護法」に従って一定の手続きを経た近隣住民は、民統線内で農事ができるようになった。現在、京畿道坡洲地域の民通線内外を行き来しながら農事をしているシリャンミンは、七〇〇余世帯二〇〇〇余名であるとされる⁽¹⁾。

全羅南道珍島郡アンノン村の場合は、韓国戦争の時に黄海道のソンファ村の一一八世帯七八五名が集団移住し、形成したシリャンミン村である。戦後半世紀を経た今日、大半のシリャンミン一世は亡くなり、生存するのは四三世帯の九八名である。それらの人々は今なお、南北が統一され、故郷に帰る日を待ち続けながら生活している⁽²⁾。

江原道東草市チョンホ洞のアバイ村は⁽³⁾、咸鏡道地域の人々が韓国戦争の時に南へ避難した後、故郷へ戻るために北上する途中、休戦にともなう軍事境界線の確定によって足止めされ、一五〇余世帯が定着することとなった地域である⁽⁴⁾。今日か、明日かと、いつでも故郷へ帰れるように仮住まいの生活をしてきたために、住宅らしき建物はなく、垣根のない仮住まいの掘っ立て小屋の軒を連ね、共同体的集団生活を営んできたので、韓国唯一のシリャンミン共同体であるとされた所である⁽⁵⁾。つい最近の二〇〇〇年、東草港開発の波に乗って、ようやく新しい居住空間を設けたばかりである。しかし、そのことによって、故郷へ戻ることを諦めたわけではない。この地域のシリャンミンたちもまた、南北統一によって故郷へ

戻れることを切望しつつ、日々を送っている⁽⁶⁾。

全羅北道金堤郡龍池面ヨンヂ農園の場合は、黄海道出身者を中心とする四五〇余世帯が定着しているシリャンミン村である。この辺の地域では、畑農事を行うとシリャンミン、田農事を行うと同地域出身住民であるとされる。田濃事には先祖代々からその地に住みついている土着の住民が付き、畑濃事には他所者のシリャンミンがつくとすることは一見至極当然のように思われるが、両者を識別する言説からは、タヒャンサリにおけるシリャンミンの立場と、シリャンミンに対する地域住民のイメージが窺われる。

以上の他に、同郷人同士ではないが、シリャンミンが自然に集まってタヒャンサリを始めた地域には、ソウルの真中に位置する南山（ナムサン）の中腹にある「解放村」（ヘバンチョン）と称される⁽⁷⁾、活気溢れる賑やかな町がある。

このように、定着村を形成して生活している人々の数は、シリャンミン全体の人口からすると、少数であり、多くの越南民は韓国の全国各地に散らばって、南側出身の人々と混住しながらタヒャンサリを始めていたのである。

ところで、シリャンミンのタヒャンサリの始まりにおけるもうひとつの特徴は、戦後間もなく、前述の「以北五道庁」を開設するとともに、各道の道民会を組織し、同郷人同士の結束力を強固にしながら展開されたことにある。各種親睦会や奨学会を運営し、故郷及び南北情勢やタヒャンサリなどに関する各種情報の提供と相互扶助を行うことから出発したのである。

こうして始まった道民会は今日、ソウル・各地方・海外に一五〇一の支部と⁽⁸⁾、八七二の附属団体を有するに至った⁽⁹⁾。これらの支部及び附属団体を通して、定期的な運動会・親睦会などのイベントや、合同シリャンゼ（失郷祭）などが行われている。

ここで、シリャンゼについて少し触れると、祖先に対する祭祀のことを大事にしている韓国社会において、北に残した両親や家族の生死が確認できず、歳月の流れからして明らかに生存可能性がないと判断した場合、シリャンミンは個々に両親の誕生日を命日とし、祭祀を行っている場合が多い。しかし、お盆などの墓参の際は、墓が存在しないため、墓参の代わり

に板門店周辺の臨津閣（イムジンガク）に集まって、合同祭祀としてシリャンゼを行っている⁽¹⁰⁾。北朝鮮の開城市から韓国の京畿道坡州市を経て、漢江に合流する臨津江（イムジンガン）の北の方へ向って⁽¹¹⁾、祭祀の儀式を行う。

臨津閣は、シリャンゼの時のみならず、タヒャンサリにおける郷愁の念を慰め、北の故郷により近づきたいと思う時にも、シリャンミンがよく訪れる所である。臨津閣の他にも、そうした場所には、臨津江と漢江の合流する地点にあって、北の住民の生活が眺望できるオドゥ山統一展望台と、海拔一〇四九メートルに位置し、非武装地帯の向う側に金剛山の見えるウルチ統一展望台がある。そして、軍事境界線によって鉄道が南北に分断された京原線の駅であり、「鉄馬は走りたい」という看板とともに韓国戦争中に爆撃された列車の残骸が横たわっていることで有名なウォルチョンリ駅、京義線の南側最北端駅であるトラサン駅がある。

このように、シリャンミンのタヒャンサリは、越南後、集団的に、あるいは個々に韓国全域にわたって定着したところを住処に、シリャンミン同士の結束力と相互扶助を呼びかけながら始まった。

- (1) (2) 前掲「全国シリャンミン村の現況」。
- (3) アバイとは父親のことをさす北朝鮮の方言であり、現在韓国の標準語ではアボジと言う。
- (4) 『toursorak』（雲岳山観光総合情報）第三五〇号、一九九八年三月二日、HP。
- (5) 前掲「全国シリャンミン村の現況」。
- (6) 束草市は、アバイ村の独特な咸鏡道文化を保存、文化祭りなどを行い、シリャンミン文化を全国の人々に知らせるための観光文化村として開発することを、二〇〇〇年から三年間にかけて推進中である。『全国毎日』HP、二〇〇〇年六月二八日。
- (7) 前掲『斗山世界大百科事典』。
- (8) (9) 前掲『道民現況』。道民会は、ソウルに七道中央道民会、九七の市・郡民会、八〇〇の邑民会があり、地方には八七の各市道の地方道民会、五一九の各市郡の地区道民会があり、海外にはアメリカのロスアンゼルス及びニューヨークなどの約四〇万人の地区別連合会と地区別道

民会からなる。このなかで、ソウルの中央道民会が七道となっているのは、北朝鮮に残した五道の外に、軍事境界線によって北と南に分断された京畿道と江原道が含まれるからである。

- (10) 毎年、韓国のお盆（陰暦）になると、シリャンゼのことがニュースで伝えられる。例えば、『韓国日報』、二〇〇一年一〇月一日。
- (11) 臨津江は、北朝鮮から韓国の方に向かって流れる川である。分断された国土とは反対の、統一の象徴として用いられる場合が多い。

四 タヒャンサリ、それは働きつづけること

シリャンミンたちは、徒手でタヒャンサリを切り拓かなければならず、ひたすら働きつづけていた⁽¹⁾。生活基盤が何もないタヒャンサリで生き残る唯一の道は専ら金を持つことであり、そして子供達に高い教育を受けさせることこそ、彼らにタヒャンサリを生き抜く術を与えることになることと認識していたからであった。金を持つことは、子供を教育し、係累のないタヒャン（他郷）で病気や事故の場合の保証金となり、故郷へ戻る資金となるということで、タヒャンサリにおける命の綱として考えられた。

そして、戦争への恐怖と不安は、避難民として南下を経験したシリャンミンの脳裏に焼き付いており、韓国に再び戦争が起きたことを想定し、金を蓄えておくことになる。戦争の終わっていない休戦状態であることを、彼らはタヒャンサリという高い代価を払って現実に体験しているからであった。戦争の恐怖と悲惨さを誰よりも実感している人々であったのである。

とりあえず食べていくこと、そして金を持つこと、に必死であった。そして、そのために、ひたすら働きつづけていた。これがシリャンミン一世たちの姿である。タヒャンサリという厳しく険しい道程を、非常な覚悟で臨み、労働そのものを終わりなきものとして考え、消費に対する徹底した禁欲主義を貫くのであった⁽²⁾。失業という言葉は、シリャンミンには似合わないものであった。とにかく仕事を見つけ出し、体を動かして金を稼ぐことが、タヒャンサリの一切の不安を取り除くことであると考えていたのである。

以前、韓国の高等学校用国語教科書に、「北青の水売り屋さん」（プク

チョンムルチャンス) という詩が紹介されていた⁽³⁾。これは、日本統治時代の北朝鮮にある咸鏡南道北青(プクチョン)の人々が、厳しい家計のなかでも子供の教育のため、工夫の末に資本金の要らない水売りをしていたことを詠った金東煥の詩を⁽⁴⁾、戦後韓国の高等学校で教えていたものである。「北青の水売り屋さん」の姿は、韓国戦争後の水道事情の悪かったソウルでも、毎朝見かけられたとされる。この詩を教科書で取り上げたということは、北青出身、即ち北朝鮮出身シリャンミンの勤勉・儉約・質素な姿勢と高い教育熱を、韓国社会が認めていたことを物語るものである。

そのようにシリャンミンの生きる姿が評価される反面、彼らの、齷齪と働き、金を使わないことに対して、周りの韓国人が「イルボルレ(働きムシ)」や「クドゥセ(ケチ)」呼ばわりする場合もある⁽⁵⁾。

いずれにせよ、何を言われようともシリャンミンは働きつづけ、また韓国社会でも働きつづける者として映っていた。

戦後半世紀が過ぎた今日、なおも韓半島は休戦のままの状態であり、またその間にシリャンミンたちが故郷へ戻ることはなかった。そして、戦争も起きなかった。良きにつけ、悪しきにつけ、シリャンミンたちが憂慮していた事態は生じなかったのである。一生働きつづけてきたシリャンミン一世も年老い、亡くなっていくなか、生存者も八〇歳を越えている場合が多くなってきた。ひたすら働き、必死に蓄えた、命の綱である金はどうなるのか。その金の行方を定める仕方から、シリャンミン一世たちの考え方を見てみる。

二〇〇一年、咸鏡南道咸洲出身の李富美氏(八二歳)は、食堂の厨房で三三年間がむしゃらに働いて蓄えてきた全財産の四億ウォンを、同郷出身者のための奨学金として寄付した⁽⁶⁾。からだの不自由な娘と二人だけの母子家庭を営んできた李氏は、平素は米ひと粒も惜しむ「クドゥセ」ぶりを見せながらも、娘を大学まで教育させ、身体障害者のための特殊学校の教師にまで育てあげた。李氏は、そのことへの感謝として、全財産を社会に還元したいとのことであつた。李氏の場合、「イルボルレ」として、「クドゥセ」として、子供に高い教育を受けさせるという、韓国社会のシリャンミンに対する一般的イメージを体現する生き方をしてきたのである。そして、もはや命の綱としての価値をなくした金は社会に還元することにし

た。

また、二〇〇二年には平壤出身の姜テウォン氏（八三歳）が、二七〇億ウォンの全財産を経済的に恵まれない人々のために寄付し、世間を驚かせた⁽⁷⁾。無一文からスタートしたタヒャンサリのなかで、一生を通じて築き上げた全財産を寄付することに息子の反対があったとする。それに対する姜氏の考えは、息子には最高の教育を受けさせ、結婚させ、家まで一軒建ててあげた。親としての義務は十分に果しているのだから、自分の財産は自分で自由に処分したいとするものであった⁽⁸⁾。その考えの根底には、子供には財産を残さず、財産を築く術を教えるという信条があった。姜氏の場合も、ひたすら働き、一生をかけて支えてきた命の綱を社会に還元した。

このようなシリャンミンたちの、着の身着のまま越南し、ひたすら働いて、無から築き上げた全財産を社会に還元するという考え方には、シリャンミン以外の韓国人には理解できないものがある。伝統的価値観に基づく韓国社会では、血族間の絆を重視し、「男系血族」主義に基づく祭祀、戸主相続とともに財産も直系男子（主に長男）に承継することが当然のように考えられてきたからである⁽⁹⁾。韓国戦争による、意図せざる核家族化とは言え、核家族化したシリャンミンの価値観は、韓国社会の伝統的家族制度の矛盾を切り崩す役割を果していると言える。

また、韓国の伝統社会は、日本統治・韓国戦争という近代以後韓国社会の歩みによって多く破壊されたが、そのような他者と戦争による破壊化過程は、戦後の権威主義的政治の長期化とも相俟って、韓国人の価値観の歪みを生んだ。その歪みとは、労働は賤民がするものであり、「ヤンバン」（両班、朝鮮王朝時代の特権階級）は「働かずに優雅に暮らす」ことを理想、あるいは美学とする、「ヤンバン」思想の負の面だけを受け継いだ考え方が、かなり長い間、戦後韓国人の意識のなかを根強く占めていたことである。

そうした意識は、「働くこと」と「質素であること」は、すればするだけ、そうであればあるだけ損をするという社会風潮を、一時蔓延させていた。そこには、「働くこと」と「質素であること」に徹したいとする人々に対する、嘲笑のニュアンスを含んでいた。シリャンミンに対する「イルボルレ」や「クドゥッセ」などという表現は、まさにそれを象徴するもので

あった。

シリャンミンの生き方は、このような歪んだ韓国社会の価値観を覆す役割を担ってきたと考える。実際に、シリャンミンの必死の働きによる金設けは、勤労のエートスを生み、やがては韓国財閥にまで発展するに至り、韓国経済の要衝を占めるケースも現われた⁽¹⁰⁾。そして、政治的民主化が達成された今日、韓国人の関心を引き寄せている。

しかし、このように命の綱として巨万の富を手に入れたシリャンミンは特殊な例であり、多くのシリャンミン一世は日々の生活を維持すること、即ち家族を養うだけのことに、精一杯であったことを忘れてはならない。そうしたなかであっても、シリャンミンは職種・昼夜を問わず働きつづけていたのである。

- (1) 元東鎮『挑戦と試練の五〇年—暗黒のなかにも絶望することすら許されなかった、あるシリャンミンの人生の足跡』語文閣（ソウル）、一九九六年。
- (2) タヒャンサリにおける仕事のないことへの不安には、普通の人々には計り知れないものがあるだろう。シリャンミンは仕事できることへの感謝の気持ちと、また必ずいつかは故郷に戻る準備のためという考えに基づいて毎日を労働し、従って労働することは終わりなきものとして考えていた。そのために、実際周りのシリャンミンに働かない者は見当たらず、かつ高齢者までが必ず何かの仕事を見つけて働いていることが目につく。
- (3) 「北青の水売り屋さん」『高等学校国語（上）』文教部（大韓教科書株式会社）、第二次教育課程期（一九六三～七三年）使用。この詩は、韓国現代詩一八六編のひとつとして、現在もなお大学入試のための全国高等学校共通試験としての「修学能力試験」に国語関連問題として出題されるので、高校三年生の国語受験勉強のための詩となっている。
- (4) 金東煥（キムドンファン）『国境の夜』漢城図書株式会社、一九二五年。『国境の夜』には、韓国最初の叙事詩である「国境の夜」をはじめ、「プクチョンムルチャンス」などの短詩一四編が収められている。咸鏡北道鏡城出身の金東煥（一九〇一年～韓国戦争中の拉北により不明）は、号を「邑人」、創氏名を「白山青樹」とし、二一年日本の東洋

大学文科に修学、二三年関東大震災のため中止、二四年文壇にデビューし、日本統治期の民族の悲しい運命と苦痛を詠っていたが、四〇年国民総動力朝鮮連盟文化委員などを勤め、積極的に親日活動の先鋒に立つこととなった。雑誌『三千里』（二九年）を創刊し、また李光洙（イグァンス）・朱耀翰（ジュヨハン）とともに『三人詩歌集』（同）を出して文名を博したこともあったが、五〇年韓国戦争の時に拉北されたまま行方不明となった、歴史に翻弄された詩人である。

- (5) 前掲「全国シランミン村の現況」。
- (6) 四億ウォンは、二〇〇一年当時の時勢で約四千万円ほどである。『newsFILE』（ソウル自治・議会ニュース）、二〇〇一年一月一六日。
- (7) (8) 『韓国日報』、二〇〇二年八月一七日。因みに、二七〇億ウォンは、約二七億円である。
- (9) 金容漢「韓国の相続制度」『韓国の法律文化』国際文化財団（ソウル）、一九七五年、二五五～七七頁。
- (10) 韓国財閥のひとつである「現代グループ」が、その代表例である。

五 離散家族との再会

日本でも各マスコミを通じて大きく報道されたが、二〇〇〇年六月（一三～一五日）に韓国の金大中大統領と北朝鮮の金正日国防委員長による、劇的な南北首脳会談が平壤で開かれたことは、まだ記憶に新しい。

その時の南北首脳会談で採択された「六・一五南北共同宣言」に⁽¹⁾、シランミンが長い間待ちつづけてきた、南北に離散した家族及び親戚が再会できるよう、南北訪問団を相互交換するということが盛り込まれることとなった。そして、早速、その二ヶ月後の八月一五日から一八日まで三泊四日の日程で、南北各一〇〇名ずつのシランミンが、第一次離散家族訪問団として交換されたのである。

この時に、北を訪問した南側のシランミン一〇〇名が、北にいる家族二一八名を宿舎の平壤に呼び寄せ、またその反対に北側のシランミン一〇〇名が、南にいる家族七五〇名を宿舎のソウルに呼び寄せて再会した。南北合わせて総一一七〇余名のシランミンの家族及び親戚が再会したのである⁽²⁾。実に、長かった南北離散家族再会の道程であった。

離散家族交流に関する南北会談は、南北赤十字会談が一九七一年に始まり、八五年「南北離散家族の故郷訪問団及び芸術公演団」の南北交換によって、韓国の三五家族と北朝鮮の三〇家族が二泊三日（九月二〇日～二三日）の再会を果して以来⁽³⁾、二〇余年間に七〇余回もの開催を繰り返しながら、南北双方の交渉が上手く行かず、家族再会のことは二度と実現できないままだった。

九〇年からは南北高位級会談で離散家族交流の件を取り上げ、九二年には「離散家族の老父母訪問団及び芸術団」の交換が合意できたが、実務会議の段階で流れてしまった。同じ年に、韓国政府により「八・一五民族大交流期間」（八月一三～一七日）を設け、離散家族の再会と南北間の自由往来を提案したが、北朝鮮の反応はなかった。九二年、韓国国務総理は離散家族再会及び相互交流に関する協議を北朝鮮に促したが、またもや北朝鮮の反応はなかった。そして、九四年にようやく南北首脳会談開催のことが南北間で合意され、韓国政府は離散家族問題に関し協議することを準備していたが、突然の金日成首席の死亡により、三たび流れてしまった⁽⁴⁾。

こうした南北会談がある度に、シリャンミンは固唾を飲んで、会談の行方を見守っていた。そのなかにあっても、時間だけは確実に経過し、世のなかには新しい世紀を迎えることとなった。シリャンミン一世の高齢化にともない、それ以上待たせられないという人道的見地から離散家族交流の問題が、至急解決すべき政府課題として浮上してきた。

二〇〇〇年「セチョンニョン（ミレニアム）年頭辞」で金大中大統領は⁽⁵⁾、離散家族問題解決を最優先課題と表明し、同三月には「ベルリン宣言」を通じて⁽⁶⁾、南北政府レベルの南北経済協力推進の必要性を力説し、南北当局間の直接対話を呼びかけた。これに北朝鮮は呼応し、その結果、上記の南北離散家族訪問団の交換という形で、離散家族に対する人道的解決が計られる運びとなったのである。

上記第一次離散家族訪問団に引き続き、同年一一月には第二次交換を果たし、〇一年二月第三次交換の時からは、生死・住所の確認できる離散家族の書信も同時に南北各三〇〇通ずつ交換できるようになった。以来、毎回南北各一〇〇名ずつの離散家族訪問団と各三〇〇通ずつの書信交換が行われ、〇三年九月（一日、旧暦の盆）に第八次離散家族訪問団の交換を

終えたばかりである⁽⁷⁾。

一千万という離散家族全体の数に比べると、離散家族訪問団の交換によって再会できる家族数は微々たるものである。そのため、訪問団に選定されることは、宝くじに当たるような、確率の低い狭き門である。離散家族訪問団候補者の人選に関しては、区役所・町役場など全国各地の行政機関、赤十字の全国各支社、「以北五道庁」の全国各事務所の窓口を通して申請登録したシリャンミンのなかから⁽⁸⁾、抽選によって選定している。

二〇〇一年には、四回も抽選からはずれた八二歳のシリャンミンが自殺するという事態も起こった⁽⁹⁾。四八年長男（当時八歳）を両親に預けたまま、奥さんと次男の三人で越南したシリャンミンが、生きていたうちに長男に一目会いたい、そして謝りたいという信念でいたが、シリャンゼの行われた日に臨津閣近くの「自由の橋」の下で⁽¹⁰⁾、自らの命を絶った。半世紀以上の年月を待ちつづけてきた甲斐もなく、家族の再会を目前にしての死であった。老齢のうえに、待ちつづけることに対する疲れと、何回もの抽選にはずれたことによって、希望の光を失ったことの現われであろう。

そのために、韓国では「離散一世代などに対する北朝鮮訪問証明書発給手続きに関する指針」のなかで⁽¹¹⁾、離散家族のなかで離散一世代とシリャンミン一世には、北朝鮮訪問証明書発給手続きの簡素化を計って、訪問団選定の際に優先させている。

即ち、「いかなる離散の事由及び経緯にかかわらず、現在南北に分れている八寸以内の親・姻戚及びその配偶者または配偶者であった人」と定められた離散家族のなかで、「一九五三年七月二七日（休戦）以前に、北朝鮮地域から越南した者と、韓国から拉北（越北）された者の当時の家族」（括弧は原文、以下同）である離散一世代と、「一九五三年七月二七日（休戦）以前に、軍事境界線以北の地域で出生した韓国住民」であるシリャンミン一世には⁽¹²⁾、北朝鮮訪問団関連の諸手続きの簡素化による便宜を与えるということである。

以上のような、赤十字社と政府による南北離散家族交流推進及び促進に対する努力とは別に、民間レベルにおいてもその努力はなされていた。その代表的な例が、シリャンミン出身の鄭周永氏が創業者である韓国財閥グループのひとつ、「現代」による対北朝鮮経済協力である⁽¹³⁾。

一九九八年十一月、「現代」による北朝鮮東部の名勝地金剛山観光開発事業の第一歩として、遊覧船「現代金剛」号が初出航した。その時、シリャンミンはどれほど感激したものか。乗客の半分を占めていたシリャンミンたちは、金剛山の絶景に対する感嘆よりは、両親や兄弟の住んでいる北朝鮮の土を踏んだことに対して感激し、それでもなお会えないという現実に対する切なさや悲しみの感情がこもごもに現われていた。金剛山では、故郷の方に向かって祭祀を行う人もいた。四泊五日の日程から帰る際シリャンミンたちは、船の甲板のうえで「体は帰っても心は残して置きます」「お母さん、不孝者が立ち寄って帰ります」と、遠ざかっていく北の港に向かって叫んでいたものであった⁽¹⁴⁾。

そうしたなかで、二〇〇三年八月四日「現代峨山」会長の鄭夢憲氏が飛び降り自殺したというニュースが伝えられた。鄭氏は、韓国から金剛山に続く陸路建設のため、民間人としては半世紀ぶりに初めて非武装地帯の鉄条網を越えて北朝鮮に入り、金剛山踏査の日程を二月に開始していたばかりであった⁽¹⁵⁾。それだけに、他人ごととは思えない離散家族の驚きは大きかった。その日、七六歳のシリャンミンが、ニュースの衝撃を受けて、自殺したのである⁽¹⁶⁾。平素、故郷に戻ることを希望に生きてきたが、鄭氏の死によって、もう故郷には戻れなくなったとするのが、その理由であった。特別検察制度を設け、「現代」が絡んだ対北朝鮮不正送金事件を追及、捜査していた韓国内強硬派の姿勢とは対照的である。シリャンミンの「現代」に対する期待は、離散した家族への再会に対する期待であったのである。

韓国政治の対北朝鮮強硬策や保守的路線が台頭する度に、シリャンミンは気を揉む思いをさせられるのである。北朝鮮に残した故郷や家族に再会する日が遠ざかっていく不安にかられるシリャンミンの、心の奥底に沈む苦悩と痛みを、韓国社会はどれほど理解しているものであろうか、と考えさせられる。

- (1) 統一問題を民族内で自主的に解決し、統一に向けての南北両側のそれぞれの統一構想案が提示された。統一に向けた一環として、同宣言第三項に、離散家族問題などの人道的問題を早急に解決することが合意された。前掲『南北離散家族の実状と再会の当為性』。

- (2) (3) (4) 『南北離散家族交流のための政府と民間の努力』、前掲離散家族情報統合センターHP。
- (5) 二〇〇〇年一月三日の金大中大統領の国民に向けての新年辞。
- (6) 二〇〇〇年三月九日に金大中大統領がドイツのベルリン自由大学で行った「ドイツ統一の教訓と韓半島問題」という講演のなかで、南北政府次元の南北経済協力推進の必要性を力説し、当局間の対話を促したものの。『韓国日報』、二〇〇〇年三月九日。
- (7) 二〇〇〇年九月一日の第八次離散家族訪問団の名簿は、前掲離散家族情報統合センターHP と、シリャンミン関連情報のトータルサイトである「ブックマル (bukmaru)」のHPで公開。
- (8) 『報道資料』、一九九九年六月九日、前掲離散家族情報統合センターHP。
- (9) 『大韓毎日』HP、二〇〇一年一〇月六日。
- (10) 「自由の橋」とは、臨津江の南北にかけられている橋であり、臨津閣がすぐ近くに建てられている。
- (11) 統一部訓令第二八九号「離散一世帯などに対する北朝鮮訪問証明書発給手続きに関する指針」、一九九八年八月制定、二〇〇〇年三月全文改正。
- (12) ここで定義しているシリャンミンとは、先述したようにシリャンミン一般を指す広意における解釈ではなく、韓国戦争が原因であるという狭義における定義であり、かつ厳密にはシリャンミン一世のことを指すものである。
- (13) 鄭周永 (チョンジュヨン、一九一五～二〇〇一年)、北朝鮮の江原道出身。一九九八年、「トンイルソ (統一牛)」として有名な、北朝鮮に寄贈するための牛五〇〇頭とともに韓国政府の許可無しで板門店を通過した最初の民間人である。
- (14) 『韓国日報』、一九九八年十一月二日。
- (15) 『中央日報』、二〇〇三年二月五日。鄭夢憲氏は、鄭周永氏の息子。
- (16) 『naus.net』韓国国民大学校コンピューター学部 HP、二〇〇三年八月五日。

六 シリャンミンの夜の歌

南北離散家族訪問団に抽選によって選定された人々は、選定された驚きと、家族再会への喜び、そして再び別れなければならないという悲しみの気持ちで、感情が入り乱れていた。そうしたシリャンミンの心をよく描いた「シリャンミンの夜の歌」がある。南北離散家族訪問団として北朝鮮の平壤に行き、娘と息子、越南以前の配偶者、弟に再会した、あるシリャンミンの詩を以下に紹介したい⁽¹⁾。少し長くなるが全文を掲げ、その胸中にわだかまる思いを偲ぶよすがとする。

「涙に濡れた平壤の夜」

文：金 ハン

その夜、平壤は霧に包まれた暗闇のなかを航海していた。私は、光のないホテルの窓の外を眺め、故郷の土の匂いを恋しく思いつつ、灰色の夜を過ごした。五〇年と言ったのか。その荒涼たる年月のなかを、私達は気を揉みながらお互いを恋しがり、そして気苦勞しつつ、故郷の空遠くへ絶えず糸を巻き上げてきた。あの長く長い、傷ついた年月の糸巻き…。平壤はそのような私達を迎えて、泣いていた。父と母と姉と兄と弟と、息子と、そして若かった家内と、お互いの背中を押し合うように別れ、募る思い、その西風のような恋しさに泣いた、数多い日々のなかにはいた私達。そのような私達が今、こうしてお互いを胸に抱いたまま、泣いている。戦時に別れた幼い息子と娘、その可憐で恐怖に満ちていた彼らの瞳、泣きながら見送った家内、そして、…行って来ます！お母さん、お父さん、直ぐに戻ります、すぐに！…、蘇る記憶。

そうして私達が別れたその日が、五〇年もの時間が経ったと言う。死んだと聞いた家内、そして息子と娘を、あの世に行ったと思い、お正月には祭壇の前でお祈りしていた。あの、辛く淋しかった、長く長い日々。そして今、あの時は若くてきれいなお嫁さんだった家内が、お婆さんになった姿で現われ、年若い、人恋しさに疲れ果て老いさばらえた昔の男の前で、泣いている。息子と娘が、しわだらけの老いた姿で、お辞儀している。あ！この胸痺れる、氷のように冷たい現実。彼らを残したまま去った私、その反省の気持ちを懐いたまま生きてきた私を、「大地」よ！ともに泣いてくれるのだろうか。

そして、喉乾く、待つという年月のなかに、もう死んだとされたお前に会えたのだ。弟よ！愛しいわが弟よ！私達は五〇年前という遠い昔—子供の頃の話—で、どれほど泣いたものか。惜しくて、短い時間だが、その瞬間はすべての時空を飛び越

え、絡みに絡んだ糸巻きのような傷だらけの歳月を、どこかへ行かせてしまっていた。私達は、幼い頃の喧嘩と歓声のことを思い浮かべながら、話しているのではないか。弟よ！私達は子供の時分に帰ったのである。私は、お前—あの幼い頃の弟！と話している。

そんな私達が、お年寄として、お爺さんとして再会した。しかし、悲しまないようにしよう、泣かないようにしよう。笑いながら、この喜びを声高く叫ぼう！こうして私達は生きて会っているのではないかと。私は生きていてくれたお前に、限りなく感謝する。今日のために、私は、あの長い歳月のなかに、お前を忘れられなく恋しがっていたのかも知れない。お前は笑いながら生きていこうと言い、そして私は二人がただ生きていくという、この事実が何よりもありがたかった。私は、この大いなる恩恵を、神様に向けて真心で深い感謝の祈りをささげたものだ。私達の手は、痩せ細く老いているが、私達は昔の故郷の野原と、山と、川を手探りしていた。この瞬間、理念の束縛は、お互いに脱ぎ捨てていたのだ。お前の嘘、お前の声、そしてお前の匂い—そのようなものが私には何より貴重であり、ただ嬉しい限りなのだ。しかし、このように会えたことへの嬉しさと幸福感に対して、私は報いる術を持っていない。なぜこのように、誰がこのように、私達を引き裂いたのか、そのようなことさえ聞くことを恥じるほどの、この幸福を、私は失いたくない。朝になれば私達は再び別れる。それでも、今日の、この喜びの瞬間だけは忘れないようにしよう。今夜—この夜が五〇年以上の傷のわだかまりをすべて溶かしてくれると信じよう。短い出会いの時間を惜しみながら、私達は私達に与えられた神様からの祝福を確かめるべきであろう。

そうは言っても、また別れなければならないという、この残酷な現実が、私達を待っている。なぜ？！そのことだけが知りたい。そして、私達は、その近づいてくる離別とともに、再び五〇年に亙る歳月を待たなければならないだろう。私にはそのことが耐えられない。私は、南の空に向けて飛んでいかなねばならなく、お前は痩せ細った手を、涙ながら振るだろう。明日になると、私は、お前と我が愛しい人々とも別れなければならないだろう。私は今宵を再びしびれてくる傷口を開いたまま、窓の外に映る平壇の真つ暗闇—その暗闇のなかで、霧に包まれた平壇は何を考えているのだろうかと思いつつ—を見ている。夜が明けると、私達の前を遮っていた五〇年の厚い壁は、たったの何日間だけを過ごした私が南の空の方に向かって去った後、再び私達の前に高く、高く、立ち塞がるであろう。それはいつまで、私達の前を立ち塞ぐのであろうか。弟よ！私は、あの世に旅立ったお父さんとお母さん、そして、あれほどお前が可愛がっていた妹、彼らの眠っているお墓前にお辞儀し、そのことを聞きたい。そして、ここ何日間の夢のような平壇での心残りの出会

いを、私は忘れることができなく、また長い夜を明かすだろう。明日になると、ソウルで、「シリャンミンの夜の歌」を歌いながら、弟、お前のことを忘れられなく、夜を明し、恋しがらるだろう。夜空を見上げながら、「シリャンミンの夜の歌」を…。

夜空を見上げながら、私達はひたすら歩いていた。砲声が遠くから聞こえてきても、故郷の空の方だけを見上げながら、そのまま歩いていた。いつの間にか、白い山鳩が山の中腹を飛んでいた遠い昔の故郷の道、を見ていた。この暗闇の夜空高くでかすかに光る星を見ながら、泣いていたのである。訪れてくれる人も、迎えてくれる人もいない、永い、永い休戦線と乱れ髪のような悲しい国土の向う側に、星の海が青ざめてくる夜明けを見ながら、私達はひたすら歩いた。そして、また泣いた。故郷よ！故郷よ！私はあなたをどこに置いてきたのか、私は泣きながら心のなかでそう叫んだ。北の長い、長い、暗闇のなかに欠けている月を見上げながら、泣き歩いた。その遠く長い歳月を歩いてきたように、私達は何も話さずにただ歩くだけであった。

この詩の内容は、フィクションの世界ではない。シリャンミンの置かれている現実を詠ったものである。半世紀を越える肉親との別れと待ちつづけること、反省と苦しみ、恋しさと切なさ、束の間の再会、蘇る過去の記憶、生きることと会えることへの喜びと感謝の気持ち、再び分かれる辛さ、などが分断された国土の悲劇とともによく現われている。今夜もシリャンミンは、「シリャンミンの夜の歌」を詠いながら、北の方を見上げ、肉親を思いつつ、ソウルの眠れぬ夜を過ごしていることであろう。

(1) 金ハン「涙に濡れた平壤の夜」『体験記の紹介』二〇〇三年一月二三日、大韓赤十字社提供、前掲離散家族情報統合センターHP。

七 まだ終わっていない韓国戦争 — むすびにかえて

休戦後、半世紀もの時間が経った今日、ややもすれば私達は韓国が休戦状態であることを忘れがちになる。休戦 (armistice) とは、交戦当事者間の敵対行為を一時的に停止するものであり、戦争状態は継続していることを意味する⁽¹⁾。

現在韓国には、板門店、休戦ライン、非武装地帯、民統線、「自由の橋」、「戻らざる橋」、臨津江、臨津閣、統一展望台など、休戦状態を象徴する場所が、南北を分断する地点に実在している。また、韓国の若者には兵役の義務が課せられているのである。そして、何よりも、シリャンミンが故郷に戻れず、タヒャンサリを続けている状況が、休戦状態の事実を最もよく象徴しているといえる。このことは、中国・ロシア・日本・その他の国及び地域でタヒャンサリを過ごしている韓民族にも当てはまるものであろう。

韓国の休戦状態を解除あるいは終結することには、南北統一の道があるが、シリャンミン一世の高齢化によって、彼らの生前に統一を見ることは難しいこととなってきた。一九九六年の時点で、シリャンミン一世は一三万名、そのなかで六〇歳以上の高齢者は約六九万名とされた⁽²⁾。それから約八年過ぎた今日においては、シリャンミン一世の高齢化はより進み、六〇歳以上の人々は確実に増えている。否もう七〇歳以上の人々が多くなってきた。そして、この瞬間にもシリャンミン一世は一人ずつ亡くなっているのである。従って、彼らが故郷へ帰ることは不可能に近いことになってきた。

こうしたことから、「もう、これ以上待っていただけません。色あせた一枚の古い写真を支えに、五〇年間もの長い歳月に堪えてきたのは、いつかは会えるという希望があったからです。その希望が、時には近づいたり、時には遠のいたりしていましたが、決して諦めはしませんでした。別れる時は二〇歳であった青年が、今は七〇歳の老人になっています。希望を抱きつづき、生きてきた彼らが、私達のそばを去っていく前に、南北間にいる肉親の消息だけでも交わせるようにすべきです」という⁽³⁾、切実な訴えがそのことを如実に物語っている。

南北が統一され、シリャンミンが故郷へ帰ることはさて置き、生前に、別れた家族に一目会うこと、あるいはお互いの消息のみでも尋ね合うことが至急とされているのである。

しかし、そのこともからだが不自由になる前に、という前提があつてのことである。実際に、シリャンミン二世である朴チャンホ氏の場合⁽⁴⁾、二〇〇一年二月二六日第三次南北離散家族訪問団に母親（七八歳）が選定されたが、その母親は前年の六月に倒れ、意識不明の状態であった。その

母親を北朝鮮からの訪問団として韓国を訪れた父親（八〇歳）と再会させ、父親が手を握り締めても何の反応を見せない母親のことを見守った。その時、朴氏は、前年の六月に倒れる直前までの五〇年間で母親は父親のことを思いつづけていたと言ひ、「半年だけ早く再会したならば」と泣いていたのである。

そして、韓国戦争がまだ終わっていないことと関連して、私達は北朝鮮内に存在する離散家族のことを忘れてはならない。北朝鮮内のシリャンミンは戦後半世紀の間、家族中に越南者がいることから、思想的に疑われ、社会的に不利な待遇と厳しい状況に置かれていたとされた。しかし、近年南北離散家族訪問団交換への北朝鮮の対応に見られるように、北朝鮮内シリャンミンの処遇は緩和されてきたと言われる⁽⁵⁾。

そうしたなか、今日新たなシリャンミンが生まれ、タヒャンサリを歩もうとしている。近年の北朝鮮からの脱北者が、そうである。そして、彼らもまた離散家族の傷を背負いながら、生きていくことになる。韓国戦争が完全に終結しない限り、こうしたシリャンミンは今後も増え続けるであろう。⁽⁶⁾

「ソウルから平壤までタクシーで五千元。…モスクワにも行ける、月にも行ける、平壤にはなぜ行けない。…統一の日には、儲からなくても良い、離散家族を乗せて行こう…」という離散家族出身のタクシー運転手の歌は⁽⁷⁾、南北統一による韓国戦争の休戦状態の終焉を待ちつづける、シリャンミンの気持ちがよく現われている。

二〇〇二年、ワールドカップ・サッカーの共催で日韓両国が湧いていた年、日本でも三〇余年前に封印されていた「イムジン河」（臨津江のこと）という歌がリリースされた⁽⁸⁾。「イムジン河、水清く、とうとうと流る、水鳥自由にむらがり飛びかうよ（中略）北の大地から、南の空へ飛びゆく鳥よ、自由の使者よ、誰が祖国を二つにわけてしまったの、誰が祖国をわけてしまったの」と続く、この歌も韓国戦争によるタヒャンサリを余儀なくされた、あるシリャンミンの心情を詠ったものであった。

タヒャンサリを生きつづけるシリャンミンたちは、至るところで韓国戦争の痛みを噛み締めているのである。

(1) 前掲『斗山世界大百科事典』。

- (2) (3) 民主平和統一諮問委員会、ソウル鍾路区支部のHP。民主平和統一諮問委員会（民主平統）は、韓半島の民主的平和統一のための政策樹立及び推進に対し、大統領に建議し、諮問に応じることを目的とする大統領諮問機関である。
- (4) 朴チャンホ「胸痛む半世紀ぶりの再会」、前掲『体験記の紹介』。
- (5) 北朝鮮内シリヤンミンへの待遇は、二〇〇〇年の前述「六・一五南北共同宣言」以後、越南者家族への身分制約が緩和しつつあり、本人の能力次第による仕事ができるような雰囲気になりつつあるとされる。このような情報は、南北離散家族訪問団として韓国を訪ねた北朝鮮の家族が、韓国の家族に伝えているものである。前掲『南北離散家族の実状と再会の当為性』。
- (6) 最近の脱北者のためには、一九九六年に人権運動家・知識人・脱北者が中心となって「北朝鮮人権市民連合 (Citizen's Alliance for North Korean Human Rights)」が設けられ、北朝鮮人権問題に関する国際的キャンペーンを行っている。
- (7) 一九九一年初に労働者の歌の一部として、韓国でタクシー運転手の趙チュヒョン氏が作詞、尹ミンソク氏が作曲した（日本語訳は、在日韓国人歌手趙博）。統一を主題とした大衆歌謡として、働きながら生きる平凡な大衆の統一に対する考えと感想を最もよく反映している歌であると評価されている。李英美『歌—お話し袋』ノクトウ（ソウル）、一九九三年。因みに、李英美氏は筆者と同名異人である。
- (8) 『イムジン河』、作詞朴世永、作曲高宗漢、日本語訳松山猛、歌ザ・フォーク・クルセダーズ、CONSIPIO RECORDS、二〇〇二年。なお、本CDのライナーノーツは松山猛による。